

## 『私とわたしが会おうまで』 - 彩暁

※お読みいただく際はブラウザの横サイズを調節してください。より快適にお読みいただけます。

屋敷をなんとか抜け出して二十分。慎重に動いた甲斐あって誰も追ってくる人はいないようだった。そして今、私はトンネルの出口に張り付きながら待ち伏せをしていた。

「痛っ……」

サイズが合わないサンダルで走ったせいで足が痛む。

この村と、この人生とさよならをするまであと五分。暗い星空の下、私は今日までの事を振り返った。

こんな小さな田舎であったが普通の少女として生まれ、育ち、普通の女性として結婚した。なのに、なんであんな目に会わなきゃいけないの。普通の幸せをどうして

やがてトンネルから轟音が響いてきた。

「ごめんなさい、守雄（もりお）さん。あなただけ残すことになって——」

ごめんなさいを繰り返すたびに身体中がじんじんと痛く感じる。もうじき跡形もなくなるのを拒むかのように。

轟音がだんだんと大きくなり、強く、黄色い光が迫ってきた。

死にたい、死にたくない、ジレンマが繰り返されている中、気がついたら私の身体はトンネルの方に投げ出されていた。

最期に瞳に映ったのは黄色い光の正体だった——

## Chapter 1

数年前まで走っていた列車はモータリゼーションとか災害とかの理由で廃止になってしまった。そのくせ道路の整備が中途半端で高速道路もない。

『やっぱり廃線にするのは間違いだよ。一日に八往復くらいしかなかったけどね』

幼馴染の朱美（あけみ）は電話越しでこうこぼした。

俺の故郷、月見村（つきみむら）は人口が千人にも満たない小さな村だ。コンビニ、スーパー、それどころか信号機もないような所で、産業といえばほとんど農業だ。

「そうだよな。明日のバスを調べなきゃな」

路線バスは通っているがそれも一日に数本程度。地元の人には主に車で移動している。俺も免許があればなあ……

「それじゃ、明日は朝早く出るからそろそろ切るね。おやすみ」

『うん、おやすみっ』

受話器を置いて、詰め込んだ荷物をちらっと見た。衣類や生活用品も少しあるが大半は工具で占められている。俺、飯田郷史（いいださとし）は大学でデザイン工学を勉強し、卒業後に家業を継ぐことになった。四月からしばらく東京の方で修業をしたが、こうして七月に実家で仕事をするようになった。実家か……まあゆっくりするには悪くないが。

\*\*\*

「改めて戻ると相っ当な田舎だなあ」

バスから見える景色といえば山、廃トンネル、畑、わずかな家。本当に何も無い。こっちが帰省するというのに親は修行と称して海外旅行に行っている。一人というのは気楽なものだがつまらん。あのまま都会で仕事してたら良かったかもなあ。大学時代の友人もいるし、遊び場もあるし。

「あっ、郷史じゃん。お久しぶりっ！」

あれやこれやと考えているところで、電話越しに聞いた声で後ろから呼ばれた。振り返ってみると、茶色がかったボブカットの女の子が俺のほうへと走り寄ってきた。二つ下の幼馴染、菜吹朱美（なぶきあけみ）だ。

「おっ朱美！ 久しぶりだね。畑仕事は終わったの？」

「うんっ、ちょうど仕事が終わって戻ったところだよ。バスから誰か降りてきたからもしかしたら、って思ったんだ」

「見事に当たりだね」

こうして朱美と会うのは高校を卒業して以来だった。改めて会ってみるとずいぶん大人っぽくなったもんだ。

「それでさ、今晚はうちに遊びに来ない？ 晩ご飯用意するからさ」

「おっ、マジで！？」

「うん。森田（もりた）のおじさんもやってくるし楽しみにねっ」

「おう。おじさんも来るのか。久しぶりに会えるね」

確か、朱美の家はお袋がないし、親父も二ヶ月前に亡くなったんだよな。

「今は一人暮らししてるのか？」

「うんっ、だから賑やかな食卓が恋しくって恋しくって」

「そうか。俺の親も旅行に行ってるからな。帰省してすぐ、独り寂しく過ごすより嬉しいよ」

こうして、実家に戻る前に菜吹家にお邪魔することになった。

\*\*\*

今夜の晩御飯は赤だしにサトイモの煮っ転がし、鳥の焼肉風炒め、納豆、そして白ご飯。全部朱美の手作りだ。

「いただきます」

食卓には俺、朱美、そして森田おじさんの三人がそろっている。一緒に手を合わせた後にさっそく煮っ転がしを頬張ってみた。

「んぐ……もぐ……」

やや薄めであったが、素材本来の味が生きておりなかなか良かった。サトイモも、ニンジンも、えんどう豆も、どれもうまい。

「とてもおいしいね。芯は残っていないし、煮過ぎてもいない。絶妙な煮具合だね」

森田おじさんは満足げに喜んだ。

「それは良かったです。褒めてもらえるとうれしいです」

「朱美の料理を食べるのは初めてだけどこれはうまいな。おじさんも初めてなんですか？」

「ああ、こうして家に呼ばれることはよくあるし、朱美の父さんの料理も食べたことはあるけど朱美の料理は初めてだな」

森田おじさんはこの村では名が高い地主で、朱美の父親とはとても仲が良かった。母のいない家庭で育った朱美を小さいころから可愛がっており、畑仕事をよく手伝いに来てくれた。

「今日はどうされたんですか？ 畑仕事もそれほどなかったみたいですし」

「郷史が帰ってくるからと朱美に誘われたんだ。ちょうど仕事も早く終わったからね」

そう答えておじさんは味噌汁を一口すすった。

「どれもおいしいね。薄味好みなの？」

「はい、短大に入る前は濃い味ばかりでしたけど独り暮らしの最中に好みが変わったみたいですね」

俺も味噌汁を飲んでみた。濃厚な見た目に反して意外とあっさりしていて飲みやすかった。そういえば昔、ここでご馳走になったときは、味噌汁が濃かったな。今飲んでる味噌汁のほう俺の好みに合ってる。

「それで一人暮らしって結構大変そうだよな。畑も広いし力仕事だし」

「うん、ときどきおじさんが手伝ってくれるけど結構大変だね。それでもなんとかや

っていけるわ」

苦笑しながら朱美は語った。

「私のお母さんって生まれてすぐ行方不明になったでしょ。その頃は特に大変だったらしいわ。わたしの面倒も見なきゃいけないかったし、今まで二人でやってた仕事だったし。おじさんが手伝うようになるまでどうすればいいかわからなかったってお父さんも言ってたわ」

「あの頃は朱美のお父さんもひいひい言ってたね。もう見てはいられない状態だった」

おじさんも笑いながら振り返った。

「でも思うんですけど、おじさんってよく手伝っているのに、本当に仕事は大丈夫なんですか？」

村を離れる前からいつも不思議に思っていたことを口にしてみた。

「手伝いは仕事前の早朝や休日になっているからね。体力も自信あるし大丈夫さ」

「それでもわざわざ手伝うのはすごいと思いますよ」

「それだけ朱美がかわいってことなんだ——」

「じーっ」

朱美がジト目でおじさんをにらんだ。

(なにこのおじさん、長い付き合いだったけどもしかしてロリコン?)

そんな台詞が聞こえたような気がした。

「あははっ、あと朱美のお父さんとも親友だったからな。やっぱりほっとけなくってな」

「結婚すれば良かったのに……」

面白いのでいじってみた。

「まあ結婚はいいものじゃないからな」

おじさんはどこかぎこちない様子でこぼした。

「ちっ……つまらん」

「ちょっと郷史、何を考えていたんだい？」

おじさんは真意を汲み取れていないようだ。

「ここは慌てながら否定するところでしょ」

「って郷史、私は普通の人間ですよっ」

真面目につっこまれた所で俺と朱美は笑った。

「あははっ。おじさん、冗談ですよ冗談」

「わたしもちょっといじわるしたかっただけですよっ」

\* \* \*

楽しい夕食も終わり、俺は実家までの道のりを歩いていた。電灯が一つもなく真っ暗な道を、携帯のフラッシュライトを頼りに進んでいった。

「やっぱ携帯って便利だな」

俺の家は廃トンネル近くに沿って十五分くらいのところにある。トンネル周辺はとも不気味で、トンネルに入れば最後、二度と戻ってこれないなんて噂もある、まるで樹海みたいな所だった。

「んでもってこの暗闇って下手な心霊スポットより恐ろしいわい」

小さい頃、朱美と外に出て夜道で迷ってしまった事を思い出した。二人で遊びに行き、時間が経ち過ぎてそのまま夜になって、んでもって懐中電灯もなし。もう帰れないと思うほどだった。

「結局、無事親に見つかったけど俺も朱美もあの後は親にこっぴどく怒られてたな。今となってはいい思い出だ」

そんな不気味なトンネル沿いに差し掛かるところだった。俺は何か柔らかいものにつまずいた。

「うおっと」

明らかに石ころなんかではない感触に違和感を覚え、足元のそれにライトを当てた。携帯電話の放つ明かりに照らし出されたものに、俺は思わず我が目を疑った。

「うわっ！！」

体中から力が抜ける。思わず手から携帯が滑り落ち、カタカタッと軽い音を立てて足元に転がった。液晶画面は「それ」の方を向いて止まり、ライトがよりはっきりとその姿を照らし出した。後ずさりして目を閉じる。落ち着け俺、落ち着くんだ。しかし、あれはまさか……

「まさか……幽霊！？」

改めて目を開くと、携帯が照らし出した物体をちらと確認してみた。それは人の形をしていた。白い服を着た、黒い長髪を乱した、人間……女性が、仰向けに倒れていた。

「あっ……はは、や、やっぱり人だ」

ばくばくと鳴る心音が耳に響く。これがこのトンネルに出るといふ幽霊なのか。それとも……。俺は勇気を振り絞ると、恐る恐る、横たわっている女性の衣服に、そして身体に触れてみた。確かな感触があった。

「すかさずかしない……ということは……」

幽霊じゃない。普通の人間だ。なら、まずは生きてるかどうか、救急車、それと……

「とりあえずなんとかしないと！」

## Chapter 2

「……しもし、聞こえますか？ もしもし——」

誰かに肩を揺すられてる。意識とともに固い地面の感触がはっきりと現れてきた。

「意識はないか。脈を測るか」

震えている台詞ののち、喉の近くを触られる感触がした。

「んっ、んんっ」

「うわっ！？」

声の主が大きく驚くと同時に一、二歩引き下がるような音がした。こっちの方が驚いてしまった。

「あっあのっ、生きてますか？」

「んんっ……生きて、ます」

すると彼は安心したようだった。

「はあ……よかったあ。今は動かないでいいんで、ちょっと救急車呼びますね」

そう言って彼はライトを手で何か操作をさせた。すると、ライトから振動音が鳴り、光が消えていった。

「すみません、ちょっと携帯が電源なくなっちゃったので救急車が呼べないです」

携帯、救急車？ 彼は無線を持っているのかな？

「いえ……どうやら身体は動かせるみたいですし、多分大丈夫です」

「無理しないでください！」

と彼は私を落ち着かせようとした。そして、しばらくうなりながら、どうしようか考える素振りを見せた。暗くて顔はよく分からないが、声からしてそんなに歳が離れてない感じだ。

「ここからだ家が近いですし……ここにいるのも何ですうちで休みませんか？」

「は、はい」

私は自力で起き上がった。そして、星明りを頼りに二人で夜道を歩きだした。

\*\*\*

トンネルから少し歩いたところに彼の家があった。少し年季が入っており、一人で住むには大きすぎる建物だった。

「家族と一緒になんですか？」

「今は親がちよっと旅行に行ってますので一人ですけどね」

中に入って見たところ、リビングやダイニングの他に作業場らしき部屋も見られ

た。

「職人さんなんですか？」

「はい、親の跡を継いでこれからここで修業するんですよ」

彼は私をリビングに案内し、ソファに座らせた。

「こちらにどうぞ。今から飲み物用意しますので」

そう告げて彼は一旦部屋を離れた。

部屋はきれいに整理されているが、しばらく誰も使っていないせいか窓際にほこりが少しかぶさっていた。夫婦と少年、おそらく昔の彼、の写真がさりげなく飾られていた。

「お待たせしました」

しばらくしてお盆に二つのグラスを載せて彼が戻ってきた。

「どうぞ。おかわりがいりましたらいくらでも用意しますよ」

「はい、いただきます」

言われるがままに私はグラスの麦茶をいただいた。

「早速ですが、どうしてあんな所で倒れていたんですか？」

私は彼に見つかる前の事を振り返ろうとした。

「……………」

私がどうしてあそこにいたのか、そもそもここは――

「どうかされましたか？」

「はい……その、記憶がないんです」

思い出そうと記憶を掘り起こしても何も出ない。あつ――

「でも、すごい曖昧ですけど、黄色い光が見えました」

彼はきょとんとした表情で話を聞いた。

「あなたに見つかる前ですけど、私はトンネルの出口にいて、黄色い光に襲われて……それしか覚えてないです」

「……………」

眉をひそめながら、彼は私が言ったことを理解しようとした。が、結局無理だったようだ。

「そうですか……それでは明日、一緒に病院に行きましょう。今日は遅いですし、見たところ大きなけがはないみたいですから。一晩うちに泊まってください」

「ありがとうございます。えっと――」

「ああ、遅れましたが俺の名前は飯田郷史です。そちらは――」

名前……

「すみません、名前も思い出せません」

「そうですか。無理に思い出さなくても大丈夫ですよ。よろしくお願いします」

そう言って彼は二階の部屋に案内してくれた。

\*\*\*

家から歩いて三十分の隣町に行き、私は小さな診療所で診てもらった。飯田さんが言うにはこの町まで行かないと医者にはかかれならしい。

「おそらくショック性の記憶喪失ですね」

医師はうなりながらそう診断した。

「専門外なのでうまく診断はできませんが……時間がたてば戻ると思いますよ」

「はい」

私は医師の診断にただうなずいた。

「まあレントゲンを撮ったところ、頭部の外傷はあまりないですし、脳や全身に深いダメージは特になかったのでお身体についてはご安心ください。記憶の方はもう少し大きな病院に診てもらった方がいいと思いますけど、今ちょっとベッド数が足りないそうです……」

「そうですか……ならばしばらく様子見ということでもいいですか？」

どうしようか考える間もなく飯田さんが答えた。

「はい。では、もししばらくしても記憶が戻らなかつたら私のところに連絡してください。隣町の病院に紹介状を書きます」

「はい、ありがとうございます」

こうして私はしばらく居候をすることになった。

\*\*\*

隣町から戻り、午後になった。

「よし、そろそろ仕事を始めるか」

昼食が終わってすぐ、彼はそう宣言した。

「飯田さんって職人さんですよ。一体どんな事をするんですか？」

「ああ、俺は家具を作ってるんですよ。それと、なんか同じ屋根の下で暮らすんですよ、郷史でいいですよ」

彼は台所の隣にある部屋の扉を開けた。ほこりっぽい台、壁にのこぎりとハンマーなどが掛けられていていかにも作業場という雰囲気が出ている。

「材料は……ちゃんと揃っているな。これならすぐ始められる」

そう言って彼は荷物から設計図らしき紙を取り出した。

「あのっ、私に手伝えることはありますか？」

「手伝えることですか……」

飯田……郷史さんは少し考えた後、思いついた。

「それでは木材を切るんで大きさを測ってもらえませんか？」

「はいっ」

さっそく私は定規と鉛筆を手に木材の大きさを測っていった。これで終わりかと思いきや郷史さんは角材の切断と彫刻の仕事も頼んできた。

「滑らせて手を切らないように気をつけてくださいね」

慣れた手つきで手本を見せてくれた。

「うーん、しょっと。なかなか削れないっ」

けど実際にやってみるとなかなか難しい。どうやったらこんなに堅い木材をささっと削れるのだろうか？

「おおっと危ないです。もう少し力を抜いてください」

「えと……こんな感じですか？」

「はい、それと一気に削らないで浅く少しずつやって——」

言われたとおりにやってみると、今まで苦戦したのが嘘みたいに削れていった。

「おおっいい感じです」

とほめてくれた彼に気をとられ、手が滑ってしまった。

「ったっ……」

滑った彫刻刀は木材を抑えていた左手を切っていた。

「あっすみません！　すぐ救急箱を取ってきます」

「すみませんね。気が散るようなこと言ってしまって」

傷薬をかけながら郷史さんは謝った。

「いえ、集中してなかった私が悪いです」

「とりあえずこれで大丈夫です。ではこっちに下書きをしてもらっていいですか？」

彼は絆創膏を貼った後、やりかけの彫刻を再開した。私は木材に彫刻のための下書きを始めた。

それから数分ほど経って、突然呼び鈴が響いた。

「あ、ちょっと手が離せないんで出てもらえますか？」

彼の代わりに私は玄関のドアを開けた。

### Chapter 3

だんだんと暑さがピークに近づく七月の終わり、いよいよ今年初の収穫が始まる頃だった。

「うんっ、これは食べごろね」

真っ赤になったありったけのトマトを見てわたしは確信した。

「これだけいっぱいあるなら、自分用と森田さんと、あと郷史の分も用意しちゃうと」

おすそ分け用と自分用を丁寧にもぎ取っていく。

「郷史は家で仕事やってるかなあ？」

さっそく彼の家に行ってみることにした。

トンネル近くを經由して十五分。飯田家自体は畑を持ってないが、周りがよその家の畑に囲まれていて、他の家と同様にぼつんと建っている状態だ。周りの畑も昔は飯田家の所有物だったらしいが、両親が家具職人を始めると同時に畑を売ったそうだ。

到着してわたしは呼び鈴を鳴らした。

「はーいっ」

郷史のお母さん？ と思ったら違う声だった。

「あの、どなたですか？」

ドアを開けたのは長い黒髪をたなびかせた女の人だった。郷史のお母さんではないし、えっと……誰？ はっ、もしかして郷史、大学にいる間に彼女ができて、同棲してるのかな。変な誤解されたらどうしよう？

「わっ、わたし、菜吹朱美といいます。郷史にちょっと届け物を持ってきました」

一瞬戸惑ったがわたしはバスケットいっぱいのトマトを渡した。

「あっ、ありがとうございますっ」

「それじゃあ失礼——」

「おお、朱美か。驚かせて悪かったな」

「さ、郷史、おはよう」

気まずそうな雰囲気から逃げようとした所で、郷史が割り込んできた。

（ちょっと、菜吹朱美さんでしたっけ？ あなたは郷史の一体何ですか？）

「ひゃい！ ち、違いますっ。私はただの幼馴染で郷史の彼女なんかじゃ——」

「ちょっと朱美、落ち着け。この人は別に彼女じゃないから」

「そ、そうですよっ」

「ふえ？」

でもさっき、嫉妬の電波が届いた気がするんだけど。

「すみませんね。この子はちょっと思い込みが激しいところがあるんで」

「はうう……」

「大丈夫ですよ。気にしてませんから」

\*\*\*

「先ほどは失礼しました。郷史の幼馴染、菜吹朱美です。よろしくお願いします」

「こちらこそよろしくお願いします」

それから郷史は彼女の事についていろいろと教えてくれた。

昨夜、わたしの家から帰る途中で倒れていたのを発見したこと。記憶を失っていること。記憶が戻るまでしばらく郷史の家にいる事になったこと——

「——というわけなんだ。本当に驚かせて悪かったな」

「ううん、大丈夫。それより失礼してすみませんでした」

「いえいえ、私こそ」

その女の人わたしより大人びていてどこか上品な雰囲気が漂っていた。

「それで朱美、おすそわけありがとう。今日はもう仕事は終わり？」

「うんっ、あとは明日出荷の準備をするくらいだから」

「なら一緒に晚饭を食べないか？ 昨日のお礼ってことで」

「うん、ありがとう！ わたしも郷史の料理が食べてみたいな」

\*\*\*

食卓には鶏肉のトマトスープ煮込み、サラダ、そしてフランスパンが並べられた。  
「いただきます」  
さっそく郷史は採れたてトマトを使ったサラダにフォークを伸ばした。  
「うん、朱美が育てたトマトはうまいな」  
「ありがとう。このトマトスープもおいしいよ。誰が作ったの？」  
「ふふっありがとうございます。褒めてくれてうれしいです」  
女の人とはとてもうれしそうに喜んだ。  
「朱美さんって他にどんな野菜を育てているんですか？」  
「わたしはキュウリとキャベツも育ててますね。あとネギもありますよ」  
「いろいろありますね。一人だと大変そうですね」  
女の方はうなずきながら聞いて、少し考える素振りをした。  
「もし良ければ、今度朱美さんの家に遊びに行ってもいいですか？ 畑に興味を持ちました」  
「いいですよ、ぜひ来て下さいっ」  
彼女の言葉に反応し、彼ははっと表情を変えた。  
「もしかして、何か思い出せそうですか？」  
彼女はまた考える素振りをした後に答えた。  
「うーん……なんか記憶にある感じですね。でもまだよく分かりません」  
そして彼女はこう続けた。  
「あと、朱美さんと会うのは初めてじゃないような気がするんです」  
「えっ！？ でも、わたしは見覚えがないんですけど」  
「これもなんとなく感じました。他人じゃないような……」  
言われてみれば、どこかであった覚えは全然ないけど、わたしも同じような事を感じる。  
「そういえばあなたは朱美と見た目が結構似てますよね、姉妹って言ってもおかしくないですね」  
「姉妹、ですか……」  
雰囲気の違いがあるものの、体つきといい顔といいどことなくわたしに似ている。  
「しゃべり方もちょっと朱美と似ているし」  
「もしかしたら巷（ちまた）で言う生き別れの姉妹……なんてことはないよねっ」  
とは言ってみたものの本当にそうか自信が持てない。お母さんについてあまり良く知らないけど少なくとも浮気性とかそういうのは聞いた事ないわ。でも実は、二十年前に家出をしていて、その間にどこかの誰かと結婚して、いつの間にか義妹ができて……てなっていたらどうすればいいんだろう？  
「朱美さん、どうかしましたか？」  
「いや、なんでもありません。ちょっと畑関連で気になったことがあるだけです」  
「でも姉妹だったらそれでもいいんじゃないですか？ 朱美さんはなんかかわいらしいですし、こんな妹ほしいですよ」  
「か、かわいっ……いもうとっ!？」  
彼女の台詞に反応して、わたしは顔が熱くなっていった。  
「あはははっ、朱美はかわいいなあ」  
郷史の台詞が燃料のように働き、わたしを暴走に導いた。  
「はうっ、あなたと……わたしが、姉妹っ!？」  
「ふふっ、本当にかわいいですねっ」  
「って朱美!？ 鼻血出てるぞ!」

\*\*\*

「今日は夕食ごちそうさまっ」  
「こっちも楽しい晩飯になったよ。また一緒に晩飯食おうな」  
帰り際、二人はわたしを玄関まで見送ってくれた。  
「あの、もし良かったらうちにもおいでよ。また新鮮な野菜を用意するからね」



「おう」  
「あなたもぜひ来てください」  
「はい」  
喜びながら女の人は答えた。  
「じゃあ、またねっ」  
帰り道の途中、わたしは夕食の会話を反芻した。  
「あの人と、わたしが……姉妹……だったらいいなあ」

\* \* \*

トマトの出荷も終わって、畑仕事に一段落ついたところだった。わたしは夕方の仕事までゆっくりとしたひと時を味わっていた。

「よう。来たよ」  
郷史と女の人が突然やってきた。  
「おおっ、どうしたの？」  
「ちょっと仕事が一段落ついたから朱美の仕事を手伝おうと思ってきたんだ」  
「ありがとうっ。でもこっちもちょうど落ち着いてるところだから今は何も無いよ」  
「そうか。じゃあしばらく一緒にゆっくりしてもいい？」  
そんな流れで、麦茶を飲みながら三人で近況を語り合った。  
「郷史はまだ大学を出たばかりなのに、家具も売ってるよね？」  
「ああ、そんなに経験を積んでないけど稼がなきゃいけないからね」  
「でもこんな田舎じゃ注文なんてないでしょ」  
「そうでもないんだよね。一応親はここで仕事して結構注文を受けているみたいだし、実際に俺もやらなきゃいけない仕事は何件かあるんだ。あと旅行中の親の代わりってのもここにいる理由の一つなんだけどね」  
「そういえばわたしもご両親の作品を見た事ありますけど、どれも素敵でしたね」  
「はい、この地方では結構有名だそうですよ」  
確かに飯田家の家具はデザイン的にも機能的にも評判が高いけど、地方レベルでも知られているなんてすごいと思う。  
「本当にすごいんだね。じゃあわたしにもクローゼットをつくってくれないかなっ？」  
「いいよ。タダとは言わせないがな」  
「ぶーっ。幼馴染なんだからいいじゃん」  
冗談まじりでふくれっ面をしてみた。  
「こっちも時間をかけてるからな。でもちょっとくらいのサービスなら構わないぜ」  
「私も朱美さんのためなら張り切りますよっ」  
彼女も意気込んでいた。  
「もしかしてあなたも作ってるんですか？」  
「郷史さんの手伝いをちょっとさせてもらってますよ。失敗ばかりですけどね」  
彼女の手を見てみると絆創膏がいくつも貼られていた。  
「痛そうですね……」  
「それでも最近は彫刻刀やのこぎりの扱いがうまくなってるよ」  
「ふふっ、ありがとうございます」  
ここで、ふと気になっていた事を聞き出した。  
「ところで、あれから何か思い出しましたか？」  
女の人は少し考えた後にぱっとひらめいた。  
「朱美さんがうちにやってきたときからしばらく経って、野菜を育てていた記憶を思い出しました」  
「そうなんですかっ!？」  
「はい。トマト、キュウリ、ネギ……これは記憶にありますね。あと、一目見て思ったんですけど、この家もどこか記憶にあるような気がするんです」  
「じゃあもしかして……本当に生き別れた姉妹、とか……」

同じ作物を育てていて、家も記憶にありそうな感じ。それが一番自然、という気がする。

「なあ朱美」

「んっ？」

「朱美の親について何か心当たりってある？」

「うーん、別にお父さんは浮気をするような人じゃないし、お母さんも行方不明だけどそんな話は聞かないし……あっ、結婚したときは両方の家族がもめてたらしいわ」

「そういえばそんな話を聞いたな」

結婚する前は何かお父さんの家族とお母さんの家族の仲が悪かったらしく、結婚するまでいろいろと揉めていた、とお父さんから聞いていた。詳しいことは今もよく分からないんだけど、わたしが生まれた頃には仲が良くなっていたらしいし——

「朱美さん」

「はいっ？」

「せっかく朱美さんの家に来たので畑を見たいです。いいですか？」

重い雰囲気吹き飛ばすかのように彼女は笑顔で頼んできた。

「いいですよ！　そういえばまだ見せてないですよ？」

そして二人を引き連れて所有している畑を案内した。家の隣にあるキュウリやネギの畑はもちろん、少し離れたトマト畑や物置小屋の中まで回った。

「とっても広いですね。私もまた野菜を育ててみたいですっ！」

女の人は満足げに喜んだ。

「喜んでもらえてとてもうれしいですっ！　またいつでも来てくださいっ」

「改めて見るとやっぱり広いなあ。聞いている感じだと畑仕事も面白そうだね」

「だったらまた畑を買い戻せば？」

「ははっ、まあ俺はただの家具職人でいいさ。大変そうだしね」

\*\*\*

そんな感じでわいわい自宅に戻る所だった。

「おお、朱美ちゃん、もう仕事はおわったのか？」

森田おじさんと偶然出会った。

「こんにちはっ。夕方に水をやる仕事がありますけど、それまで暇なのでさっき案内をしました」

「郷史と、んっ……あとそちらの方は？」

「今、郷史の家にわけあって居候しているそうです。その、どうも記憶喪失らしくて——」

紹介しかけたところで彼女の様子に変な事に気づいた。顔に恐怖と怒りが混じっている様子で、彼女は微動だにしない。

「どうか、しましたか？」

おじさんも心配そうに声をかけたが、彼女の顔を見て顔が凍りついた。

「すみません、ちょっと体調が悪いみたいです。多分暑さのせいで……郷史さん、家で休ませてもらってもいいですか？」

「えっ、あっ……はい」

郷史は彼女を連れて去っていった。

「おじさんっ？」

「あっ、ああ、どうしたんだい？」

「おじさんはあの人を知ってるんですか？」

おじさんは少し慌てた後、落ち着いて口を開いた。

「見覚えがあるんだ。でも……まさか」

おじさんの顔はかなり強張っていた。私と彼女が去った方向を交互に見て、こう呟いた。

「まあ、似ている人なんて世の中にはいっぱいいるよな……」

「似てるって、どういうことですか？」

「いや、なんでもない。ずいぶん昔の話だ」

\*\*\*

あれから三日後、おじさんが話をしたいと家にやってきた。

「急で悪かったな」

「いえいえ、全然大丈夫です」

おじさんの様子がどこか尋常でなかった。呼吸も少し荒く、表情も少しぎこちないようだった。

「それで、一体何の話なんですか？」

「ああ、まず言うておくが、この話を聞いたら私を軽蔑するかもしれない。だけど、どうしても朱美に言いたいんだ」

「そうですか……無理しないでいいですよ」

おじさんを軽蔑するかもしれない。そう思うと聞くのが怖い。

「ありがとう……」

おじさんは自分に何かを言い聞かせ、深呼吸をした。

「さて、飯田家に居候している人についてなんだが」

「はい」

「朱美は自分が生まれたころのアルバムって見た事があるか？」

「アルバ——」

突然、おじさんのポケットからけたたましいメロディが流れた。

「ちょっと失礼」

彼は携帯を取り出し、発信先を確認する素振りを見せた。

「悪い、ちょっと電話にでるね……はい、もしもし——」

彼は『ちょっと待って』と合図して部屋を出て行った。

「アルバムかあ……」

お父さんが亡くなった時に、部屋を整理したらいっぱいあったわね。それとあの居候の人と何が——

「済まなかったな」

どんな写真があったか思い出そうとしたところで、おじさんが戻ってきた。席を外す前よりさらに緊張した様子に見えた。

「じゃあ、続けようか。朱美は、自分が生まれた頃のアルバムを見た事があるかい？」

「わたしが生まれた頃、ですか？ お父さんが死んだときに見つけたんですけど、それがどうかしましたか？」

「とりあえず一緒に見ないか？」

わたしは、整理した書棚の中から、分厚い、古ぼけた本を取り出し、おじさんの目の前に置いた。表紙をめくってた所、家族の集合写真が飾られていた。まだ若いお父さんがいた。真ん中に赤ちゃん……多分わたしだと思う。それと、あ——

## Chapter 4

廃トンネル側にある山道は、村の反対側へ回って、見晴らしの良い崖まで続いていた。そこに広がる草原で彼女は景色を見ていた。視線の先にはまっさらな空と果てしない森が広がっていた。

「待たせて悪かったな」

淵に立っていた女性を見つけ、私は声をかけた。

\*\*\*

「もしもし、森田ですけど」

朱美に全てを打ち明けようとしていた時、飯田家からの着信が来た。

『私が誰だか覚えていますか？』

電話に出た相手は郷史ではなく、あの居候の女性だった。まだ確信には至ってないが恐らく――

「菜吹朱音（なぶきあかね）か？」

『はい、昨日になってやっと名前を思い出せました』

前回とは違って特に何かを恐れている様子ではなかった。

「もしかして、全部思い出したのかい？」

『いえ、あと少し、あと少しなんです。私がどうしてここにいるのか、それがよく分からなくて……森田さん、あなたがいればきっと全て思い出せるんです』

「ああ、どうすればいい？」

『廃トンネル側の山を登ると村の反対側草原が見えます。そこで待ってます。私の思い出の場所なんですっ』

「こうして電話越しで話すのはダメかい？」

『あの場所にはないと、思い出せそうにないんです。森田さん、お願いですから来てくださいっ』

泣きが入った声で朱音は嘆願した。

「……たとえ、知らないほうがいい事実があったとしてもいいのか？」

『はい、もやもやした記憶を引きずるよりはましです』

朱音ははっきりと答えた。

「そうか、分かった。ではいつ行けばいいんだい？」

『午後二時に崖の前で待ってます』

今の時刻は午後一時十分前。朱美に全てを話すにはまだ余裕がある。

「ああ、ではそれまでに行くよ」

\*\*\*

私の声に気づき、白いワンピースにサンダル姿の彼女は振り返った。あの時、一番最後に見た姿とまったく一緒だった。

「郷史は一緒じゃないのか？」

「二人っきりで、ここで話したいことなんです」

彼女に会うまで、正直言って正体について確証が得られなかった。朱美に話す内容も推測の範疇を出ていないものだったが、彼女の電話で間違いないと確信できた。

「ここにいる理由、それが分からないんだね」

「はい、ですけど私が聞きたいのは別のことです」

まっすぐな眼で私を見つめた。

「あなたは、私にした事を覚えていますか？」

私が恐れている展開に事態が進もうとしていた。

「まさか『覚えてない』なんて言いませんよね？」

どう転んでも私の人生は終わる。それならせめて朱音と朱美が救われるようにしたかった。

「覚えているよ。あなたが守雄と結ばれているのに強引に横取りした。許婚という宿命を振りかざしてね」

「でも最終的にその約束はなしになったんでしょ」

「ああ、君の家からいきなり許婚の取り決めがなくなったね。でも私は君が好きだった。守雄に負けないくらいな」

段々と昔のことを思い出し、自分が熱くなっているのが分かる。二十年前の想いを嘔吐（おうと）するかのように、無意識に喚き続けた。

「なのになんで君は守雄を選んだんだ、何で私じゃないんだ？ あれだけ周りの圧力があつたのに、どうして？」

「最低っ」

呆れた顔をして話を聞いていた朱音は、侮蔑するような眼で私を睨みつけた。

「あなたはとても優しく、紳士で、素敵な人に見えたわ。だけど守雄さんのほうが

私にとってもっと素敵だった、そう感じたの。人を好きになる事に理由なんていらないわっ」

ため息をついた後、けなすような口調で続けた。

「そしてあなたは私を無理矢理誘拐した。守雄さんが子供と一緒に出かけてる間に、家に来て、私を車に無理やり乗せて……あなたの家に押し込んだ。そして権力を振りかざして周囲を黙らせた。立派な犯罪者だわっ」

上品な朱音はどこにあるかといった様子で、段々と怒りをあらわにしていった。

「あの時、私に何言ったか覚えてる？ 『もうあなたは死んでいるんだ。この村の中ではね』って。死んでいるなんて大間違い、死ぬより質（たち）が悪いわっ。だから私、あの夜にトンネルから飛び出して、汽車に身を投げたのっ！ だけど……」

怒りが一度涙へと変わっていった。

「死ねなかった……なんでこんなところで、記憶をなくして、そして朱美と、あなたと会って……」

収まった怒りが再びこみあげていった。

「なんで、なんであなたが今ものうのと生きてるのっ！？ あんな事したのにどうしてっ！！」

怒りと怨恨に支配された朱音は私の腕を引っ張っていった。そして崖にめがけて振り飛ばそうとした。

「待てっ、そんなことしたら朱美が——」

「うるさいっ！！」

振り飛ばされた私はふちの方に倒れた。朱音からの蹴りが来る中、私は咄嗟に軸としている彼女の左脚を引っ張った。

「お母さん、ダメっ！！」

突然の叫び声に反応したのか、脚の動きが一瞬止まった。右脚を上げたまま止まってしまった彼女は、そのままバランスを崩し、真っ逆さまに崖へ転落しようとした。宙に浮いている彼女の左脚を私は必死に掴んだ。

「はあっ……はあっ、つつ……」

先に掴んだ右腕は肘の辺りで脱臼しており、痛みで力が入らなかった。左手も添えて彼女を支える一方、パニックになった朱音は私の手を掴もうと腕を上にも伸ばした。しかし、スカートが真っ逆さまになって何も見えず、腕は見当違いの方向に伸びていた。

「お母さん、今来たから動かないでっ！！」

朱美が近づいて母親の足首を掴もうとした。が、もがき続ける朱音に私の両腕は耐えられなくなっていた。

「うぐっ、うあっ……」

握力を失った両手から足首が滑っていった。なんとかして足を掴もうとした。

「今掴むからっ！！」

朱美が腕を伸ばし始めたところだった。朱音は左足のサンダルを遺して崖の底へ墜ちていった。

「……お母さんっ！！」

朱美は下のほうへ手を伸ばそうとした。

「朱美、ダメだ！！」

私の声で動きが止まった朱美は崖の底を見つめ続けた。墜ちた先の森はとても深く、朱音がいるかどうかも分からなかった。

「おじさん、朱美！！」

少し遅れて郷史が崖にたどりついた。崖の底と左手に握り締めていたサンダルを見て、彼も呆然としていた。

「……うっ、おかあさんっ……ひっくっ」

\*\*\*

朱美はひたすら泣き続け、私と郷史は頭を真っ白にして草原に佇んだ。山を降りた

のは日が暮れるころだった。

「そういうことだったのか……」

菜吹家に三人集まっている状態で、私は朱美に打ち明けた事の全てを郷史にも話した。

「あの電話があったときは私の命はない、そう思ったんだ」

二十年前の彼女が変わらぬ姿でいるはずがない、と思ったが私を見ていきなり避ける様子から嫌な予感を感じていた。あの後、昔起こったある怪奇現象が私の記憶をかすめた。

ある夜、汽車がトンネルを抜けて月見村に向かうところで突然女性が飛び出した。急ブレーキをかけたが時既に遅し、女性を撥ねて三十メートルほど過ぎたところで停止した。しかし、運転手が外へ降りたところ、死体どころか血痕も見当たらなかったという。最終的にこのケースはただの運転手の錯覚と処理されたが、その女性は神隠しにあったのではないかと噂されている。

「私は二十年前に人として最低な事をやってしまった。朱音がいなくなり、朱美の父さん、守雄は家に引きこもってしまった。畑も放って、朱美の世話も十分にできていない様子で、見ているこっちが心苦しかった。この時、私はやっと目が醒めたんだ。自分の過ちにな——」

そして自戒の念を込め、生涯独身を貫き、菜吹家を支える事に決めた。だが、事の表面化を恐れ、守雄に真実を告げられなかった。

「私は臆病者だ。罰を受けることを恐れ、自分が課した戒めに酔いしれていたんだ——」

私は反省している、そう思い続けていた時に朱音が再び現れた。

「やっぱり私は最低な男なんだ……」

自分でもどこまで話していたのかよく分からなかった。郷史はただ無言で話を聞いていた。

「えぐっ、森田さん……最低っ……」

全てを打ち明けた時と同じ台詞をこぼしつつ、朱美はひたすら泣きじゃくっていた。

\*\*\*

数日後の夕方、郷史から電話がかかってきた。

『もしもし、おじさんですか？』

「ああ、どうしたんだい？」

電話から荒い呼吸が聞こえていた。

『朱美が、家にいないんです』

「えっ、家にいないってどういうことだい？」

そういえばここ最近、畑を見に行っても姿が見えなかった。

『家に人の気配がないですし、家に電話しても出ないんです。携帯にかけてもつながらないんですよ』

「本当か!？」

『はい、それでちょっと朱美に教えてもらった場所の合鍵使っただけに入りました。けどやっぱり誰もいなかった』

「まさかっ、一体どういう事なんだ!？」

『分からないです。最近、人の気配がしなかったから心配してたんですけど……とりあえず警察を呼びます!』

\*\*\*

「菜吹朱美さんですが、まだ発見されておられませんね」

朱音さんが崖に転落した件について、私は警察署で三度目の事情聴取を受けていた。

「届け出から十日経つというのに目撃情報も遺留品もないんですよ」  
担当の刑事は顔をしかめながら告げた。  
「それで、話をもとに戻しますが、あなたは行方不明になっていた菜吹朱音さんに崖から突き落とされそうになった、そうですね？」  
「はい、間違いないです」  
「そしたら朱音さんの娘、朱美さんがやって来た。朱音さんは気を取られてバランスを崩し、あなたの腕にぶら下がっていたと」  
「はい」  
「朱美さんが助けようとするもあなたの腕が耐えきれず、朱音さんは転落してしまった、ということですね」  
「はい」  
刑事は少し悩みながらこう述べた。  
「前の聴取で述べたことの繰り返しになりますが、事件前および事件中のあなたの目撃者が現に行方不明です。あなたと朱美さんの関係、失踪前後のお二方の動向についてこちらも調べさせていただきました」  
あまり気持ちの良くない事だが、それでもしなければ刑事なんて務まらないだろう。  
「アリバイがあるとは言えませんが、森田さんに怪しい行動は見られませんでした。そして——」  
前の事情聴取でも聞いた事。となれば、あとはあれか。  
「崖の下とその周辺を搜索しておりますが朱音さんの遺体も遺留品も未だにみつかりません。後で隠していた事も想定しましたが痕跡すら確認していません」  
まるで二十年前の出来事のような。

## Chapter 5

ざわざわっと枝葉が揺れる音が聞こえる。  
「……っ、たっ……」  
私がどうしてここにいるのか、落ち着いて振り返ってみた。  
白のワンピースに片足しかないサンダル。目に映るのは背の高い樹木。確か私はここに——  
そうだった。私はあの男に復讐しようとしてこんな所に落ちてしまったんだ。でも、あの高さだと生きていられないはず。  
「ということは……」  
ここがどこか考えているところ、女性の泣き声がどこからか聞こえてきた。  
「ぐすっ……家はどっちなの、お母さんはどこなの？」  
泣き声が私の方向に向かって近づいていった。  
「どうしようっ、おかあさ——」  
仰向けに倒れている私を見つけて彼女は止まった。菜吹朱美という名の女の子が泣き顔から笑顔へと表情を変えていった。  
「おかあさんっ！」  
彼女は私を見るなり胸に抱きついてきた。  
「ちょっ、ちょっと……」  
「お母さん、朱美だよっ。名前……覚えてるからっ」  
喜びながら彼女は少女のような顔を上げた。二十二歳とは思えないような子供っぽい顔だった。  
「朱美……あけみっ？」  
私はひたすら彼女のなすがままに抱きしめられ続けた。  
「お母さんがいなくなるなんて……さびしいから、ひっくっ」  
一度喜んでいた朱美が再び泣き始めた。  
「おかあさん、えぐっ……おかあさんっ」  
「朱美……」

彼女の名前を呼んだとき、何かが外れたような気がした。  
「えぐっ、おかあさ、んぐ……うあっ、あああああっ！」  
胸の中で感情を全開に号泣していった。  
「朱美っ……あけみっ」  
私は少女の背中をただひたすらに撫で続けた。気がついたら私の目からも涙が流れていた。

\* \* \*

「朱美、これからどうするの？」  
私の胸の中で朱美はずっと泣き続けていた。  
「……ひくっ……だいじょうぶ、あるけばきっと出られるからっ」  
目をこすりながら朱美は答えた。  
「それに、この森で暮らすとかいいんじゃない？ ターザンごっこかやってさっ」  
「面白そうねっ。でもその前になんとか出口を探さないとねっ」  
私は立ち上がろうとした。すると、朱美は幼い瞳で私を見つめてきた。  
「おかあさんっ」  
「なあに？」  
「ずっと、いっしょだよね？」  
もちろん答えは決まっている。  
「うんっ、ずっといっしょだよっ」  
すると彼女は腕を私の背中に回し、抱き寄せてきた。  
「んっ……！！」  
そして顔を近づけて唇を重ねてきた。世間体、母子、今置かれている状況、全て気にしないと云わんばかりに唇に吸い付いた。娘で、まるで妹のようで、もう一人の私のような朱美に私は身も心も任せた。  
  
「お母さん大好きっ！」

[戻る](#)